

今まで 5 回にわたって、「よい音楽」、「よい演奏」を見直してきました。私は、1980 年代に長くウィーンに留学していましたが、当時は、基本を大切に、伝統を守ることを厳しく教えていただきました。それから 30 年以上が過ぎた現在は、インターネットで情報が溢れ、往年の名演奏から子どもの発表会の演奏まで簡単に聴くことができるようになりました。学生たちの様子を見ていますと、好きか嫌いかで音源を選んでいるようですが、結局、よい演奏には、伝統的な決まりごとがあることを知らずに音楽を聴いていると感じます。「好き、嫌い」はその人の趣味ですが、クラシック音楽は、芸術の領域に分類されていて、芸術には、長い伝統と規則が存在しています。クラシック音楽を専門とする者は、よい音楽とは何かを、もう一度、あらためて確認する必要があると思います。

そこで、この連載では、特に「美しく豊かな音」、「リズムの正確さ」、「テンポの把握」を中心にお話してきました。他にも、「フレーズングの把握」、「装飾音の演奏法」や「演奏会本番の緊張や暗譜」など精神的な領域までお話したかったのですが、また次の機会にお話します。それらの「よい演奏」については、C.P.E.バッハとチェルニーがたいへん詳細に例を挙げて説明しています。チェルニーは、ご存知の通り、ピアノ学習者が少々悩まされる膨大な練習曲で知られていますが、その練習曲にも「よい演奏」を実現するための目的が書かれています。チェルニーは、練習曲以外にもピアノ上達のための著書も多く、ベートーヴェンの愛弟子でもあったため、ベートーヴェンが、C.P.E.バッハの「正しいピアノ演奏法」を必ず読むように言っていたことも書いています。このように、18 世紀後半から 19 世紀には、よい演奏の基礎が定着していました。

20 世紀になると、さらに多くの著名な教育者、ピアニストがその基礎を元に実践的な要素を交えて著書を出版します。私がとても勉強になったのは、ヨーゼフ・ディッヒラー先生が書いた著書です。ディッヒラー先生は私の恩師で、レッスンでも伝統的な音楽的基礎を熱心に教えてくださいました。その後、私はロンドンでアンジェイ・エスターハージィ先生に出会い、身体の使い方とよい演奏を結びつける演奏法を学びました。大学での研究では、スポーツコンディショニングを専門とする先生と共同で、「よい演奏とスポーツコンディショニング」を融合して、身体からではなく、「よい演奏」の実現の観点からの身体の使い方を提唱しています。この連載で、ピアニストはアスリート？という題名がありましたが、リズムもテンポも、正確に体感し実現できるためには、筋肉を鍛えるのではなく、上手に使って、健康な心と身体をもつことで、「よい演奏」を実現できるというアプローチのほんの入り口をお話しました。これからは、作曲家別に譜例をたくさん提示して、その部分が理想的に演奏できる方法を伝えていきたいと考えています。この連載は、今回で終わりますが、クラシック音楽を芸術という領域として伝統を継承していけるようなピアノ演奏を目指して、これからも皆さんと勉強していきたいと思います。この連載についてのご質問などがありましたら、編集部までお寄せ下さい。またお会いしましょう。